

犬島発

— 現代演劇の新潮流 —

福武教育文化振興財団では、ことし創立二十五周年を迎えるのを機に、「犬島海の劇場」をメインテーマに掲げ、今年度から二カ年にわたる記念事業を展開しているところです。その一環として、この秋には犬島を舞台に維新派の新作『風景画』と、移動演劇・宮本常一への旅『地球四周分の歌』の二作品の公演を予定しています。

六月二十四日、pieni:deux(岡山市内)において、維新派主宰で演出家の松本雄吉氏と注目の若手演出家・村川拓也氏を迎えて、現代演劇の新しい流れを語っていただく機会を設けました。

両演出家の作品は、九月から開催される日本最大の国際舞台芸術フェスティバル「フェスティバルトーキョー(F/T)」に参加することが決定しており、特に維新派はこの五月にシンガポール公演を終えたばかりでもあり、今日日本で最もホットな演出家の話は興味深いものになりました。以下二人の演出家の想いをまとめてみました。(進行役は創立二十五周年記念事業総合ディレクター・大森誠一氏)

脚本家、演出家 維新派主宰

松本雄吉



創立25周年記念事業・総合ディレクター
NPO法人アートファーム代表理事

大森誠一



犬島の地域資源がつなぐ
日常とアート、
そして離島と世界

演出家

村川拓也



Photo by ; Daisuke Aochi

流れを語る

大森；この秋、犬島でふたつの注目されている演劇が開催される。維新派の野外劇は、これまで巨大な劇場を構築して行われていた。今回、松本さんは、まったく新しい視点で作品をつくられると伺っているが……。

松本；犬島には、ちょうど幼稚園の運動場ぐらいの

本さんと近い感覚だと思う。

しかし、今回のチラシの文章に「犬島は風景ではなく場所である」と書いたので、やばい、これは松本さんに怒られると……(笑)

僕は、風景になる前に場所が存在すると思っていて、目でとらえられることは、それ以下でもそれ以上でも



大きさの扇型をしている小さな入り江があって、干潮時には一面の干潟が現れる。感覚的にしか言えないが、それがすごくよくて。そこを会場に決めた。干潟は、月の引力によって潮の満ち引きがおこり、一日2回現れる。それは、大きく言えば、宇宙原理を足元で体験できる場所。宇宙の中に住んでいるすごさを日常的に体験できる場所であることを発見した。これは大発見といえる。

犬島の「精錬所」が常にそこにある風景ならば、恵まれた時にしか出会えない干潟は、偶然性の産物。発見する喜びを、見る側の主体性にゆだねられる風景であることに気づいた。同時にこの場所は、野外劇をしている僕らに、何か啓示を与えているのではないかと感じた。

シェークスピアなどを持ち込むのではなく、その場所が喚起するような演劇をしたいと考えている。物語やストーリーを観客に押し付けるのではなく、観客とパフォーマーが同時に、その場所を考えられるような……。空間的にも時間的にも余白を持ちたい。観客とパフォーマーが余白を持ちつつ、ひとつの風景に向き合う劇。そうした新しい形のパフォーマンスの始まりにしたいと思っている。

村川；僕も犬島で、持ち込みのフィクションをたちあげるのには違和感があるので、場所を感じるそこからスタートしたいと思っていた。そのあたりは、松

ないというとらえ方をまず、したいと思っている。犬島の風景は、人をノスタルジックにさせると思うけれど、僕が最初に行った犬島の印象はどちらかというと現実的で、ノスタルジックという言葉だけでは片づけられなく、全てが見えてくる感覚だった。

松本；昨年の犬島公演は、野外劇といいながら野外の風景を劇場化している演劇であったように思う。これからもその方向性は残すが、あくまでも風景とは自分よりも外側にあって、自分の内側とは分けて考えることを重視したい。今回は、どちらかという後者の方向性だといえる。

村川君が判りやすく言ってくれた「そこにあるものは、それ以下でもそれ以上でもない」それは真実だと思う。僕らは世界（風景）をどうみているかという、質量や重量をそれ以上にしてみたり、それ以下にしている。存在そのものに対して、都合のいいように見ている面がある。

一度、それを断ち切って、風景は手に負えないことではなく、自分の内側を磨くという立脚を再認識することなのかなと思う。

大森；ところで、村川さんの作品では、船に乗るところから演劇が始まる……。

村川；さきほど述べたように犬島を場所として、それ以上でもそれ以下でもないということを観客にきっちり意識させたい。

松本 —— **宇宙の中に住んでいるすごさを日常的に体験できる場所であることを発見した。**

村川 —— **それ以下でもそれ以上でもないとらえ方をまずしたい。**

その為に、宝伝港から船に乗って 10 分かけて犬島に行き、また帰って来る。島に近付いていますよ、島から離れていっていますよ、という体験をしっかり認識させる仕組みをつくっていきたい。

また犬島に渡って、目に見えているものとは別に、宮本常一のテキストが放送塔から流れてくる。観客は目と耳を使い自分のなかで組み立ててもらえるような劇にしていきたい。

松本；時間的にはどれくらい？

村川；だいたい 1 時間ちょっと。時間がきたら終演……。

松本；覚悟の 1 時間だね（笑）。最大公約数的には、島内放送が聞こえるという感じかな。宮本常一のくだりは？

村川；ラジオドラマみたいにしようかと。島内放送のスピーカーから、録音した宮本常一の世界を流す。島には、ポイントポイントに俳優がいて、観客は自由に僕の作ったものを観てもいい、観なくてもいい。ひとつの場所にずっと居てくれなくてもいい。

観客以外の島に住んでいる人にも楽しんで観てもらえたらいいなと思っている。

松本；あの島に島内放送はいいね。ラジオドラマが聞こえているような感じで、宮本常一の世界が聞こえて、その中で畑仕事をしている島の人がいるか？すごく興味深いね。

宮本常一が舞台上で語られるよりも、島のスピーカーから聞こえてくるというのが、リアリティがあるね。的を射ているな。演劇ではあるけれど、日常的であっても不思議ではないと感じるような。演劇を観た人に聞いてみたいね。

大森；『風景画』の作品には、人物の固有性とかモチーフとかは？

松本；あけぼの丸の船長に体験記を聞いて、それ

を俳優に語らすとか。島の人たちに聞き取りをして、それを置いてみたい感じがする。抽象的な表現になるけど、言葉をオブジェ的にしてみたい。俳優が演技する言葉は、オブジェではなくて心の転換の道具になる。その点、村川くんがやろうとしている、`スピーカーから出る声`はオブ

ジェ性があると思う。

舞台上で俳優がうまく会話をするとするのは、野外で芝居をするときには違う感じがして……。野外では、心情的な言葉とか、心理的な言葉は、圧倒的な風景に負けてしまうのではないかな。じゃ、野外の風景の中では、どんな言葉が有効的なのかを考えたとき、オブジェ的に置いていくという新しい演劇の在り方が自ずと要求される。そのあたりが野外でやる意義でもあるのかなと。

大森；音響は？

松本；いつもみたいな大きな音響はやめて、小さいスピーカーを点在させて東西南北感がよくわかるようにしようかと。スピーカー自体もオブジェ的に。劇場では大きなスピーカーって神様みたいな魔術師的な存在だけど、小さなスピーカーが一生懸命に音を出している、人間的な

感じにしたいなと。

大森；夜の舞台が多い松本さんが、今回は昼間の演劇にした意図は？

松本；一つには、自然の摂理に任せたので、昼間ということ。9 月 23 日は干潮が 12 時 39 分。それ以外は、12 時間後なので夜中になってしまう。もう一つは、維新派は、白塗りで演技をするのだけど、照明の世界でいうと白塗りってすごく劇場的だね。また、方法論的に限られてもいる。その白塗りを風景の中に放り出して、その違和感からもう一度白塗りを考え直してみたい。自然光の中の白塗りは、異

常に白くみえたり、観客にとってもあり得ないことで、それが何か結界を作り、そこで観客一人ひとりが想起する劇場ができるという面白さがある。

大森；また、客席もつくらないとか……

松本；それは、村川君こそ（笑）。村川君自身が客かどうかもわからない、知らない間に出演者になっている可能性もあるわけだ。

村川；観客同士が見るっていうのもある。

大森；移動演劇というのは、常に舞台が動いているという……。

村川；お客さんには地図を渡し、それを見ながら移動してもらったり、留まっている場所を作ったり……

松本；演劇ばい場所を作る？濃淡がある感じかな。演劇をしている場所、パフォーマンスしている場所、日常の場所……

村川；犬島公演をやっている場所があっという間。ピラを配っている人がいて、小さな犬島演劇場があっという間に公演をしているような。

大森；『風景画』は、劇場のひとつ……。

松本；中の谷は、地形そのものが昔の劇場になっている。コロシウムのような形でまわりから干潟の底

を見降せる劇場の形になっている。観客には道路に段ボールか座布団を敷いて観てもらってもいい。途中で場所を移動して観てもいい。

形状は劇場を喚起する場所だけど、撮影も OK にして、撮影のために俳優がポーズをとったりするとか……というゆるい感じにして、逆説的なところを観客が遊んでくれたらいいなと。

大森；役者は、干潟でずっと演じている？

松本；先日、役者を連れて犬島に行き、干潟に立たせてみたら、足首の上まで沈むので稽古していた複雑なステップがまったく無駄になった。足元のド

ロがどんどん沈んでいくので、役者は重力を感じるなんて言っている。

だから、動けないから、動かないを積極的なテーマにしようかと思っている。

大森；最後に今秋、松本さんも村川さんも先駆的な国際舞台芸術祭のフェスティバルトーキョーに参加と聞いているが……。

松本；犬島は、干底(干潟)でするので、東京では池袋の西武デパートの屋上ですることに決めた。沈んだ状態と浮いた状態、どちらも、日常ではあまり人が行かない所。ただ、屋上には泥がないので犬島の干潟での作品をそのままスライドはできないね。

村川；僕は公募プログラムのコンペに参加して、8 作品の 1 つに選ばれた。犬島の作品をもっていきたいと思っていたけれども、東京では場所選びが難しく、結局、シアターグリーン(池袋)での舞台に決めた。

大森；演劇は東京で創られた作品を地方が享受するという歴史が長く続いてきた。しかし近年、その流れが逆転する活動が各地から生まれている。この「犬島海の劇場」でも、瀬戸内海の離島で創られ

た作品や関わった作家を、東京という市場(消費地)に発信していくことを理想としている。言い換えれば、地方から日本の現代演劇を主導していく新しい力や流れを創り出していく試みでもある。

この対談の内容は、[youtube にて公開中。](https://www.youtube.com/user/artfarmVideo?feature=mhee#p/ufest)
www.youtube.com/user/artfarmVideo?feature=mhee#p/ufest
www.bh-project.jp/festival/jpn/event/data/festival_tokyo2011
[犬島海の劇場 HP \(イベントの詳細はこちらでご確認ください\)](http://www.artfarm.or.jp/25th/)
www.artfarm.or.jp/25th/



Yukichi Matsumoto



脚本家、演出家。1946年熊本県大草生まれ。大阪教育大学で美術を専攻。1970年維新派を結成。1974年以降のすべての作品で脚本、演出を手がける。1991年東京・汐留コンテナヤードでの巨大野外公演「年街」より独自のスタイル「チャンチャン☆オペラ」を確立。野外劇にこだわり、2001年奈良県室生村の野球グラウンドで上演した「さかしま」をはじめ、琵琶湖の水上舞台で度肝を抜いた「呼吸機械」。昨年の瀬戸内国際芸術祭の開幕を約四千本の丸太による野外劇場で飾った「台湾の、灰色の牛が背のびをしたとき」など次々と話題作をつくりだしてきた。

受賞作品としては2002年「カンカラ」が朝日舞台芸術賞受賞。2004年「キートン」は読売演劇大賞優秀演出家賞受賞。2008年「呼吸機械」は朝日舞台芸術賞・アーティスト賞、芸術選奨文部科学大臣賞受賞。昨年の「台湾の、灰色の牛が背のびをしたとき」も2010年ベスト舞台1位に選ばれるなど受賞歴多数。



維新派「風景画」

2011年9月23日(金・祝) 12:09 開演
 24日(土) 13:19 開演
 25日(日) 14:16 開演

移動演劇・宮本常一への旅「地球4周分の歌」

2011年10月9日(日)・10日(月・祝) 開演 14:20 (宝伝港発)⇒犬島逍遙⇒終演 16:10 (宝伝港着)

犬島の地域資源と舞台芸術をつなぐ

財団法人福武教育文化振興財団創立25周年記念事業「犬島 海の劇場」の一環として、今秋9月、犬島の扇型に広がる入江を舞台にした維新派『風景画』、10月には島全体を舞台にした移動演劇・宮本常一への旅「地球4周分の歌」の2つの新作を上演しました。今号は、この2つの作品についての感想を演劇関係者、一般公募の出演者、本公演にご協力いただいた方々に、寄稿していただきました。

— 維新派『風景画』公演 作・演出=松本雄吉



松本さんから入江を舞台にしたいと聞いたときは、島の人間でも入ったことがない入江で、本当にできるかどうか心配だった。足がどれだけぬかるか予想できなかったし、潮の満ち引きも季節によって違うし。どうすれば役者が動きやすくなるのか、自分なりに考えて松本さんに話したりもした。

今回もたくさんの方が犬島に来てくださった。県外の方も多いと聞いた。少しでも気持ちよく帰ってもらうために、きれいな犬島にしておくことをこれからも大切にしたい。そのための労力は惜しまないし、協力もしていきたい。

安部寿之 犬島町内会長、岡山市東区犬島在住

少しでも気持ちよく



Photo all by ; Yoshikazu Inoue

太田耕人 演劇評論家、京都教育大学英文学科教授、京都市在住

あざやかな「美術」描く

弧をなす岸辺に俳優がぐりと並び、海の神を言祝ぐように手を打つ。自然に敬虔な祈りを捧げ、自らの表現で風景に切り込む——まさにその決意をあらわす冒頭だったと思う。

維新派『風景画』の犬島公演は、壮大な美術で知られる松本雄吉があえて美術を一切つらず、かわって風景をまるごと取りこんだ。

一人の俳優が膝まで海に入り、屹立したかと思うと、一人また一人と海へ降り、やがて二十人余りの俳優が座標をつくるかのように入り江全体に整然と広がる。点から線へ。そして図形へ。やわらかな光に包まれた瀬戸内の自然に、峻厳な幾何学的構成が対置され、あざやかな「美術」となった。

ノアの箱船以来の人類の歴史が歌われ、犬島の過去が語られる。死者の野焼き、島民運動会、犬島音頭、硫黄工場設立時の福島からの移民。のどかな風景の背後にある島の歴史が、みごとに立上がった。その瞬間に立ち会えたことを、私はいつまでも忘れないだろう。



犬島の方々の話から、一般公募者で犬島のことを伝えるシーンを創り、上演する。それは思ってもみないことでしたが、制作過程で繰り返された試行錯誤の連続は、犬島を深く知り、主宰の松本さん、維新派の方々、一般公募の仲間達の様々な考え方、物の見方を学んだ濃密な日々でした。本番では維新派の皆さんと寝食を共にし、その温かさ、意識の高さなどを肌で感じ、本物を知る刺激的な日々でした。この公演に参加できたことを誇りに思います。

金崎洋一 「風景画」公募出演者、ダンサー、高松市在住

本物を知る刺激的な日々